

城山城跡

—川崎町大字川崎所在の埋蔵文化財発掘調査—

川崎町文化財調査報告書

第19集

2019

川崎町教育委員会

じ ょ う や ま じ ょ う

城 山 城 跡

—史跡範囲内容確認に伴う埋蔵文化財発掘調査—



2 0 1 9

川崎町教育委員会

序

本書は、平成28年度から平成30年度までの3ヶ年にかけて川崎町教育委員会が実施した史跡範囲内容確認に伴う埋蔵文化財発掘調査の内容を編集した調査報告書であります。

本町は、明治から昭和にかけて国の近代化を担い発展した筑豊炭田の中心地であり、大手有資力だけでなく地元から生まれた様々な企業が炭鉱を経営しました。最盛期には20数社が120以上の炭鉱を経営し、筑豊最大の採炭量を誇ることとなり、炭の都「炭都川崎」と呼ばれました。中央から豊富な資金と最先端の技術が導入され、全国から多くの労働者が集まり、それまでの川崎町とは全く違った文化が誕生しました。その反面、これまでの貴重な伝統文化や古文書等の歴史資料が散逸したり、閉山後の急速な人口流出により、炭鉱時代以前の川崎町の歴史や文化を知る手がかりが多く失われてしまいました。その中で、埋蔵文化財の発掘調査で得られる資料は、本来の川崎町の歴史や文化を知る上で数少ない貴重な文化遺産です。

今回調査を実施した城山城は昔からその存在は知られていましたが、構造や規模等その内容については不明な点も多くありました。これまで町内でも幾つか山城の存在が指摘されていましたが、多くは開発によって姿を消してしまいました。その中で、これまで開発による破壊を受けず当時の原型を留める当遺跡の調査は、当時の田川市郡に存在した小規模山城を知る上で大変貴重な資料になるものと期待されます。本報告書が貴重な文化遺産に関する資料として大いに活用され、文化財愛護思想や文化意識の向上に役立つとともに、郷土の歴史や文化的風土を創造する教育文化のまちづくりに寄与できれば幸いと思います。

最後に、今回掲載した発掘調査にあたりご協力及びご理解、ご指導いただきました関係各位の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成31年3月31日

川崎町教育委員会

教育長 讀井 明夫

例　　言

- 1 本書は、川崎町が城山を中心に計画した公園整備事業に先立ち、平成 28 年度から平成 30 年度にかけて川崎町教育委員会が実施した城山城に係る史跡範囲内容確認調査の成果をまとめた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 平成 28 年度から平成 29 年度の 2 ヶ年度は周辺を含む分布調査を実施し、平成 30 年度は城跡を確認するための発掘調査を実施した。
- 3 分布調査に係る費用は、平成 28 年度は国庫補助事業の採択を受け実施し、平成 29 年度の費用は全額川崎町が負担した。
- 4 平成 30 年度に実施した発掘調査及び整理作業に係る費用は全額川崎町が負担した。
- 5 分布調査並びに発掘調査及び出土遺物の整理作業等は川崎町教育委員会が実施した。
- 6 本書内における個別の記録実測図は、長谷川清之が実測した。また、当城跡の地形図や割付図等は株式会社 C U B I C の実測支援システム「遺構くん」を使用し作成している。
- 7 本書内における遺物実測図は長谷川が実測した。また、製図は株式会社 C U B I C の実測支援システム「トレースくん」を使用し作成している。
- 8 本書内における個別の遺構写真等は長谷川と末吉隆弥が撮影し、遺物写真は長谷川が撮影した。また、航空写真撮影については九州歴史資料館に依頼し撮影した。
- 9 本書内に示す方位は、全て真北（G N）を指す。
- 10 出土遺物、図面及び写真等は、川崎町教育委員会が収蔵、保管している。
- 11 調査及び整理体制については、本文中第 1 章に記したとおりである。
- 12 本書は第 1 章を末吉が、その他を長谷川が執筆し、全体の編集は末吉が実施した。

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査の経過	1
第2節 位置と環境	3
第3節 城山城について	7
第2章 調査の概要	
第1節 全体の概要	9
第2節 調査前の状況	9
第3節 調査の内容	12
第3章 総括	25
第4章 附編（参考資料）	26
図版	27

挿図目次

福岡県内広域位置図	中表紙
第1図 城山城跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）	8
第2図 城山城跡全体図（1/500）	10
第3図 城山城跡遺構配置図（1/800）	11
第4図 10号トレンチ出土土師器実測図（1/3）	15
第5図 12号トレンチ出土土師器実測図（1/3）	16
第6図 1号トレンチ実測図（1/40）	18
第7図 2号トレンチ実測図（1/40）	18
第8図 3号トレンチ実測図（1/40）	18
第9図 4号トレンチ土層実測図（1/40）	19
第10図 5号トレンチ土層実測図（1/40）	19

第11図	6号トレンチ土層実測図(1/40)·····	19
第12図	7号トレンチ土層実測図(1/40)·····	19
第13図	8号トレンチ実測図(1/40)·····	20
第14図	9号トレンチ土層実測図(1/40)·····	20
第15図	10号トレンチ実測図(1/40)·····	20
第16図	11号トレンチ実測図(1/40)·····	21
第17図	12号トレンチ実測図(1/40)·····	22
第18図	13号トレンチ土層実測図(1/40)·····	21
第19図	14・15号トレンチ土層実測図(1/40)·····	23
第20図	16号トレンチ実測図(1/40)·····	23
第21図	17号トレンチ実測図(1/40)·····	23
第22図	18号トレンチ土層実測図(1/40)·····	24
第23図	19号トレンチ実測図(1/40)·····	24

図版目次

- 図版.1 城山城より金国山を望む（航空写真）
 城山城より古廻山を望む（航空写真）
- 図版.2 城山城主郭部付近（航空写真）
 城山城主郭部付近調査風景（航空写真）
- 図版.3 城山城跡遠景1（北東側、島廻地区より撮影）
 城山城跡遠景2（東側、太田地区より撮影）
 城山城跡遠景3（西側、田川市猪国畠より撮影）
- 図版.4 城山城跡遠景4（西側、田川市猪国より撮影。麓は田尻集落）
 城山城跡全景（南側、直下より撮影）
- 図版.5 発掘調査前の主郭部（東部曲輪より撮影）
 東曲輪（主郭より撮影）
 南上段曲輪（主郭より撮影）
 南上段曲輪から主郭を望む（パノラマ撮影）
- 図版.6 南下段曲輪の手前から主郭を望む
 南上段曲輪から南下段曲輪を望む
 主郭北西側の南側斜面
- 図版.7 北側より主郭部を望む（パノラマ撮影）
 発掘調査前の北東部平場周辺1（北側より撮影）
 発掘調査前の北東部平場周辺2（東側より撮影）
- 図版.8 南東側の岩盤露頭

- 発掘調査前の 1 号トレンチ周辺（北側より撮影）
1 号トレンチ全景 1（南側より撮影）
- 図版 .9 1 号トレンチ全景 2（南東側より撮影）
2 号トレンチ全景 1（北側より撮影）
2 号トレンチ全景 2（東側より撮影）
- 図版 .10 3 号トレンチ全景 1（南側より撮影）
3 号トレンチ全景 2（南東側より撮影）
4 号トレンチ全景（西側より撮影）
- 図版 .11 4 号トレンチ土層断面（南側より撮影）
5 号トレンチ全景（南側より撮影）
5 号トレンチ土層断面（東側より撮影）
- 図版 .12 6 号トレンチ全景（北側より撮影）
6 号トレンチ全景及び土層断面（北東側より撮影）
7 号トレンチ全景（南側より撮影）
- 図版 .13 調査前の堀切り部（主郭南側よりパノラマ撮影）
8 号トレンチ全景 1（南側より撮影）
8 号トレンチ全景 2（南西側より撮影）
- 図版 .14 8 号トレンチ全景及び土層断面 1（南東側より撮影）
8 号トレンチ全景及び土層断面 2（北東側より撮影）
8 号トレンチ全景（北側より撮影）
- 図版 .15 9 号トレンチ全景（南側より撮影）
9 号トレンチ全景及び土層断面（南東側より撮影）
10 号トレンチ全景（北東側より撮影）
- 図版 .16 10 号トレンチ全景及び土層断面（南東側より撮影）
11・12 号トレンチ全景（南東側より撮影）
11 号トレンチ全景（北東側より撮影）
- 図版 .17 11 号トレンチ全景及び土層断面（北東側より撮影）
12 号トレンチ全景 1（北東側より撮影）
12 号トレンチ全景 2（北東側よりパノラマ撮影）
- 図版 .18 12 号トレンチ全景及び土層断面（南東側より撮影）
12 号トレンチ中央部落込み状況
12 号トレンチ集石検出状況
- 図版 .19 12 号トレンチ内土師器出土状況
13 号トレンチ全景（北東側より撮影）
- 図版 .20 13 号トレンチ全景及び土層断面（北西側より撮影）
14・15 号トレンチ全景（南西側より撮影）
14 号トレンチ全景（南西側より撮影）
- 図版 .21 14 号トレンチ全景及び土層断面（北東側より撮影）
15 号トレンチ全景（南西側より撮影）
15 号トレンチ全景及び土層断面（北西側より撮影）

- 16号トレンチ全景（南側より撮影）
- 図版.22 16号トレンチ全景及び土層断面（東側より撮影）
- 17号トレンチ全景（西側より撮影）
- 17号トレンチ全景及び土層断面（南側より撮影）
- 図版.23 18号トレンチ全景（北側より撮影）
- 18号トレンチ全景及び土層断面（東側より撮影）
- 19号トレンチ全景（東側より撮影）
- 図版.24 19号トレンチ全景及び土層断面（北西側より撮影）
1. 10号トレンチ出土土師器
2. 12号トレンチ出土土師器

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

田川市と川崎町の行政境に所在する田尻山は通称「城山」と呼ばれており、昔から山城跡であることが知られていた。その頂上付近に毎年きれいな花を咲かせるヤマザクラがあると川崎町の執行部に情報が寄せられ、川崎町長を中心とした地元有志を募り、平成28年の春にヤマザクラの調査が行われた。この時、山頂からの展望が素晴らしい、周辺に手付かずの自然の森が残っていることから、展望台を備えたトレッキングコースの整備が話題になったそうである。

また、毎年川崎町で開催されている「子ども議会」において、「町内に子どもが安心して遊べる公園を整備してほしい」との要望があり、候補地を探しているところであった。そこで、自然の中で子ども達が集うことができ、川崎町が展望できる新たな観光地として城山一帯を整備する城山観光公園整備事業が計画されることとなった。

平成28年度に福岡県教育委員会が刊行した『福岡県の中近世城館跡III－豊前地域編』^{注1}で、「城山城」として当城に関する報告が挙げられた。これを受け川崎町教育委員会（以下、「教育委員会」と称する。）は、城山城跡の現状を詳細に把握する必要があると判断し、同年10月、公園整備を実施する前に事前調査を実施する必要性を上申した。しかし、当時は計画区域が周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」と称する。）に該当しなかったため、既に事前の仮設工事が急激に進められていた。そこで、急遽現地の事前把握を実施したが、教育委員会としては小規模ながら全体に残存状況が良好である当山城跡は将来的に川崎町の史跡候補として考えるべきであるとの結論に至った。これに基づき関係各課と協議を重ね、計画に先立ち文化財の事前調査を実施することが決定した。

事前調査は、先ず包蔵地の範囲を確定する必要があると判断し、平成28年12月20日から現地踏査を開始したが、田尻山山頂及び山峰部が田川市との行政境になっていたため、田川市教育委員会の文化財担当職員と一緒に現地を確認し、平成29年3月に包蔵地の範囲を確定し、田川市教育委員会と共に福岡県教育委員会へ申請を行った。また、分布調査と同時に周辺の伐採や登山道の整備並びに子ども広場として整備が計画される場所での試掘調査を断続的に実施し、平成30年3月28日に終了した。

その後、事前調査の結果を基に川崎町と教育委員会で協議を行ったが、文化財の調査が完全に終了するまで展望台等の工事は実施せず、山城の全容を解明するための発掘調査を実施することになった。そこで、福岡県教育委員会並びに田川市教育委員会と協議を行ったが、最終的に川崎町内に所属する範囲内で史跡範囲内容確認調査を実施することになった。

調査は平成30年4月23日から8月20日まで、全て人力によるトレンチを主体とした調査を実施した。その後、文化財整理事務所において整理作業を実施し、3月15日に全ての作業が終了した。

調査組織は以下のとおりである。

調査体制（平成 28・29 年度　事前調査当時）

【事務組織】

教育長	讚 井 明 夫
社会教育課長	崎 野 晋一郎
社会教育係長	渡 邊 文 雄
主任主事	末 吉 隆 弥（調査担当）

【調査組織】

調査員	末 吉 隆 弥
嘱託職員	長谷川 清 之
事前調査従事者	藤川 岳久、奥村 ひろみ、吉岡 淳子、衛藤 直美、 小森 奈津希、堀江 達男、春本 篤、荒木 昭生、 八隅 定雄、堀川 幸敏、内藤 歩、廣畠 宗男（順不同、敬称略）

調査体制（平成 30 年度　発掘調査当時）

【事務組織】

教育長	讚 井 明 夫
社会教育課長	中 村 久美子
社会教育係長	渡 邊 文 雄
主任主事	末 吉 隆 弥（調査担当）

【調査組織】

調査員	末 吉 隆 弥
嘱託職員	長谷川 清 之（調査担当）
発掘調査従事者	藤川 岳久、衛藤 直美、堀江 達男、春本 篤、 八隅 定雄、堀川 幸敏、吉岡 淳子、小森 奈津希、 内藤 歩、山本 裕、井戸 初子、平嶋 寿俊 (順不同、敬称略)

なお、調査にあたり岡寺 良氏（福岡県立九州歴史資料館）、中村 修身氏（城郭研究家）、高尾 栄市氏（築城町教育委員会）にご指導いただきました。記して感謝申し上げます。

第2節 位置と環境

【地理的環境】

城山城は福岡県田川郡川崎町大字川崎と田川市大字猪国にまたがる田尻山山頂部に位置する。

川崎町は福岡県の中央内陸部の東寄りにある田川郡の南西部に位置し、その重心は北緯 $33^{\circ} 34' 02''$ 、東経 $130^{\circ} 49' 01''$ である。北は田川市と接し、東は大任町、同じく東から南にかけては添田町、西は嘉麻市と接している。川崎町の南北の距離は 12.572 km、東西は 4.945 km で、その面積は 36.12 km² である。

川崎町の変遷をみると、現在の川崎町域は明治から昭和にかけての合併、編入を経て形成されたものである。明治 20 年 4 月に上真崎、下真崎、安宅、黒木、荒平、木城の 6 カ村が合併し安眞木村に、東川崎、西川崎両村が合併し川崎村となる。更に、同 21 年の市制町村制の施行により同 22 年に川崎、田原、池尻の 3 カ村が合併し川崎村となった。その後、50 年間は川崎村と安眞木村がそれぞれ独立した行政として存続するが、昭和 12 年 4 月に安眞木村が川崎村に編入され、翌 13 年に町制が施行され現在の川崎町となった。

自然環境をみると、川崎町の地形は町のほぼ中央を南から北へ遠賀川水系の中元寺川が流れおり、この川の浸食により盆地と数多くの粗野地を形成している。このため他の地域へ移動する際は必ず峠を越えねばならず、明治 32 年に鉄道が開通するまでは遠賀川を利用した水運が盛んに用いられていた。現在の自動車社会においては道路整備が進み新たなバイパス網が完備されつつあり、福岡市や北九州市等の主要都市まで 1 時間程度で移動できるようになった。ちなみに町内最高峰の戸谷ヶ岳（標高 712.4 m）と池尻三ヶ瀬地区との標高差は 677 m もあり、およそ 4.4°C の気温差がある。

川崎町の地形は大きく 2 つに分けることができる。中元寺川の上流にあたる南部には固く良質な朝倉花崗閃緑岩と、比較的脆い真崎花崗岩という 2 つの花崗岩層が広範囲に分布しており、これらは放射性元素を用いた年代測定によって約 1 億年前の中生代の白亜紀に形成されたことが判明している。これに対し、中元寺川の下流にあたる北部には、約 4,000 万年前から 3,500 万年前までの間に堆積した大量の石炭を含有する古第三紀層が広がっている。これは直方層群と呼ばれ、筑豊地域全体に分布しており、かつての筑豊炭田の主要な炭層を多く含んでいた。石炭は石油が重要視されるまでは国のエネルギー政策の基幹産業として地域経済と日本国の大規模化を支えていた。川崎町内での採炭開始については明確な資料が残っていないので不明だが、17 世紀には瀬戸内地方で行われる製塩のための燃料として輸出された記録がある。その後、明治時代に入ると沢山の地場炭鉱が開坑されるだけでなく三井、古河等の大企業も経営に乗り出し、最盛期には 120 坑以上の炭坑が乱立し炭の都「炭都川崎」として大いに栄え、人口も昭和 33 年に最大で 43,102 人を数えた。特に翌 34 年の川崎小学校では総児童数 3,890 人を数え、福岡県内で最大規模の学校となった。その後、エネルギー革命で石炭需要の激減に伴い町内の炭鉱も次々と閉山し、昭和 46 年の豊前炭鉱の閉山を持って町内の炭鉱は全て閉山した。

石炭産業が終息した現在、川崎町の基幹産業は炭鉱時代以前の農業に戻っている。特に、近年

までは主要農産物のコメが生産調整されていたため、イチゴや巨峰を中心とした果樹栽培が盛んとなっている。また、昭和50年代後半から開始された国道バイパス網が完備され、交通の利便性を活かした商工業が少しずつであるが進出してきている。

また、国指定名勝「藤江氏魚樂園」をはじめ県指定や町指定の文化財、更には近代化産業遺産を活かした文化のまちづくりや、「かわさきパン博」等様々な観光イベントを展開し、町の活性化に力を入れ続けている。

【歴史的環境】

歴史環境に目を向けると、前述したように川崎町は英彦山山系に連なる山間部を蛇行しながら流れる中元寺川の浸食によって形成された粗野地であり、遠賀川水系の造り上げた肥沃な田川盆地には古くから人々が暮らしていた地域である。しかし、田川地域で旧石器時代の遺物が出土した例は極めて少なく、その起源を想像するのも難しい。本町でもこれまでの発掘調査で旧石器時代のものと判明した遺跡は確認されていないものの、田原地区にある「田原遺跡」^{注2}や安眞木地区の「木城遺跡群」から当時代の石器や剥片を採取しており、太古のこの地に人類が生活していた確かな証拠といえる。

縄文時代に入ると、「木城遺跡群」等山間部の遺跡から早前期の土器が出土しているが、英彦山に連なるごく一部の山間部に限られる。町内における当時代の明確な遺構はそのほとんどが後晩期のものであり、町内各地の遺跡から少数ながら遺物とともに遺構が検出されている。とはいっても縄文時代が主要素の遺跡でないため詳しいことを述べることはできないが、前期等に山間部で狩猟採取を中心に生活していた人々が、後晩期には平野部へ生活拠点を移していく過程を窺い知ることができる。

弥生時代については前期の遺跡は確認されていない。遺物の出土例はあるものの、その数は極端に少ない。遺跡の存在が予想される場所はあるが、学術的な調査は行われておらず、詳細は不明である。

中期になると、中元寺川の両岸を中心に町内全域にまんべんなく遺跡が分布するようになる。おそらく水稻耕作が可能な平野部をもとめ、他地域からの移住が進んだものと考えられている。この時期は水稻耕作も定着し人口も激増、更に階級社会の萌芽が窺える時期であり、その後現在まで続く農村地帯としての原型が造られたことが容易に推測できる。

後期になると新しいムラの形成はあまり見られなくなるものの、建築技法に掘立柱建物の新技法が登場する。また、祭祀系の遺物が多数出土するようになり、シャーマンや族長を中心とした集団社会の確立を窺い知ることができるようになる。特に、田原地区に所在する「田原遺跡」は町内だけでなく田川市郡内でも最大級の遺跡であり、集落がムラへと発展するとともに、階級社会の萌芽を窺うことができる貴重な遺跡である。

古墳時代に入ると、町内にも安眞木地区に町指定史跡である「戸山原古墳1号墳」を中心とする「戸山原古墳群」をはじめ、「木城古墳、宮前古墳、朝倉古墳群」^{注3}が、田原地区に「中田原古墳群、西田原古墳群、石橋池西古墳群、鎮西原古墳群、岩鼻古墳」^{注4}等数多くの高塚を有する古墳が造られたが、採炭時代の乱開発によりそのほとんどが破壊されてしまった。また、石棺墓群のほか田川地方を含む北部九州から派生した横穴墓群も多数存在するが、植林や無秩序な乱開発により破壊が著しい。この時代はそれぞれの地区にムラが形成されたことがこれまでの調査で明らかとなっており、集落同士の結びつきや特権階級の登場等弥生時代に比べより社会の組織化が

進んだと思われる。しかし、各遺跡ごとの詳しい比較検証が進んでおらず、その解明が今後の課題として残されている。

ムラでの生活様式は弥生時代とさほど変わらないようだが、本町でも5世紀に入ると竪穴住居の端にカマドが造られるようになる。また、出土遺物に須恵器が登場するようになる。6世紀前半から後半にかけての須恵器窯跡は田川地方で未だ確認されておらず供給元については今後検証する必要があるが、7世紀になると町内に「号四郎窯」が開窯したことが解っている。当窯跡は破壊が著しいうえ学術的な発掘調査が行われていないため詳細は不明だが、資料採取は可能なため、今後は窯本体の様相や生産された須恵器の流通について検討する必要がある。

古代に入ると、川崎町も天皇を中心とした中央集権国家に組み込まれていく。この時代、農政の大改革として条里制が施行されるが、川崎町内にも文献史料に記述のある地名として北から「池尻別符」、「田原莊」、「田原新莊」、「河崎莊」、「虫生別符」の5ヶ所が条里制を伴う水田地帯として確認されている。これら5ヶ所は大宰府領として整備されたものだが、10世紀には全て宇佐神宮及び関係寺社の荘園として寄進されている。これら荘園は寺社だけでなく一部貴族や在地領主の争いの原因ともなる。

九州は平家との結びつきが強い地域だが、田川地方をはじめ豊前地域は豊後に下向した源為朝の支配下にあった。川崎町は地理的に豊前国と筑前国の境に位置するため度重なる争乱に巻き込まれ、国境沿いの山間部に防衛のため山城が配されるようになった。町内は度重なる戦災を受けるが、この時期田原遺跡で鉄生産が開始されており、農業だけでなく工業都市として発展する礎が築かれた時代である。

中世は在地領主が武士化する時代である。前述したように源氏の支配下にあった豊前国に対し平氏側は豊前国と筑前国の境に位置した川崎町を大宰府防衛の最前線と考え、「龍円城」をはじめ幾つかの山城を築城している。この後、川崎町は元寇、南北朝争乱、戦国期の下克上の動乱に巻き込まれ続け、度々豊前国や筑前国に編入されることとなり、独自の文化圏を形成していくことになる。

この時代、町内では農業基盤が拡充するが、それ以上に工業が盛んになる特徴がある。中元寺川は良質な砂鉄が採れることもあり、田原遺跡及びその周辺で製鉄業と鉄器生産が行われていたことが確認されている。更に、東川崎地区にある「七反坪遺跡」からは土師器が大量生産されたことが判明しており、川崎町は工業都市として繁栄したことが出土遺物から窺える。しかし、応仁の乱に始まる戦国期になると、大友氏と毛利氏の争乱、秋月氏の侵攻等により町内は幾多の戦乱に巻き込まれ荒廃する時期もあるが、画聖「雪舟」が安眞木地区の荒平に來訪した際築庭したと云われている国指定名勝「藤江氏魚樂園」が造られるなど、文化面では発展を極めていった時代である。

近世は田川地区にとって動乱の時代である。中世末期に秋月領となった川崎町は豊臣秀吉の九州出兵で戦場となり、国境付近に点在した山城は前述した藤江氏魚樂園のある荒平城を除き全て落城した。この合戦により町内は焼け野原になったと云われている。その後、徳川家による江戸幕府が開かれると田川地域は細川藩の所領となる。この時代に年貢台帳と人畜改帳が完備され、明治維新までの農村基盤が完成した。

寛永9年（1632年）、肥後の加藤家が改易となり、細川氏が転封となった。替わりに豊前国へ封入したのが九州唯一の譜代大名である小笠原氏である。この小笠原藩の治世下で米の増産政策として数多くの井堰や溜池が整備され、当初の15万石から18万石に増石されるが、増産の

ための各種事業に係る負担は農民に押し付けられただけでなく、小倉耕という不正耕により本来より多く年貢をとりたてられた農村は荒廃し、数多くの無主田を生み出す原因となった。

農業とは対照的に工業では新たに櫛鉗の生産が開始され、藩の貴重な財源となった。鉄の生産は中世から引き続き行われているが、幕末に石炭の採炭が始まると軽工業は一気に衰退し炭鉱が工業の中心となり、やがて前述したように明治の近代化を支えた筑豊炭田の中心地として繁栄していった。

この時代、町内のほとんどの寺院が天台宗から一向宗（現在の浄土真宗）へ改宗しており、農民に対し仏教思想が根付いただけでなく、村の楽しみとして盆供養も定着し、口説きを基調とした地域ごとの特色をもった盆踊りが現在まで受け継がれている。また、五穀豊穣や厄除退散のため神幸祭や祇園祭など、村内で行う祭りが数多く始まった。更に、祭りやハレの日に祓いのため奉納されるしし舞が根付き、川崎町の民俗芸能が確立された時代といえる。

註 2 :『田原遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第 15 集	川崎町教育委員会	2015
註 3 :『木城遺跡群』	「川崎町文化財調査報告書」第 16 集	川崎町教育委員会	2016
註 4 :『戸山古墳』	「川崎町文化財報告書」第 8 集	川崎町教育委員会	2010
註 5 :『宮前遺跡群』	「川崎町文化財調査報告書」第 10 集	川崎町教育委員会	2012
註 6 :『冥加塚遺跡』	「福岡県文化財調査報告書」第 77 集	福岡県教育委員会	1987
註 7 :『龍円城跡』	「川崎町文化財調査報告書」第 11 集	川崎町教育委員会	2013
註 8 :『七反坪遺跡』	「川崎町文化財報告書」第 4 集	川崎町教育委員会	1994

参考文献

『川崎町史』		川崎町	2001
『われらの川崎』	「郷土読本」	川崎町	1969
『郷土の「むら」の形成と発展』	「川崎町部落解放史」	川崎町教育委員会	2004
『永井遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第 1 集	川崎町教育委員会	1985
『冥加塚遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第 2 集	川崎町教育委員会	1985
『公門原遺跡・真崎遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第 3 集	川崎町教育委員会	1993
『田原 A 条里遺跡』	「川崎町文化財報告書」第 3 集	川崎町教育委員会	1995
『西川崎遺跡・鎮西原遺跡』	「川崎町文化財報告書」第 7 集	川崎町教育委員会	2009
『川崎塚田遺跡・川崎ヤシキ前遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第 9 集	川崎町教育委員会	2011
『三ヶ瀬遺跡』	「川崎町文化財調査報告書」第 13 集	川崎町教育委員会	2014
『田原遺跡 7 次調査』	「川崎町文化財調査報告書」第 18 集	川崎町教育委員会	2017

第3節 城山城について

城山城は、第2節で述べたとおり田川市と川崎町の境に位置する田尻山山頂付近に位置し、古くから山の名前を取って「田尻山城」と呼ばれていたが、『猪位金村沿革史』（作成年代不詳）には正式名称として「勝山城」と記されている。現在は大木が多く自生しているが山頂からの展望は素晴らしい、英彦山や岩石山並びに古廻山を一望することができる。更に、田尻山の北側にある金国山には「金国城」（別名、「立尾城」）が存在し、その間の谷間に猪膝街道（秋月街道）と猪膝宿があり、交通の要所を押さえる重要な場所に立地している。

その猪位金村沿革史によると、正平13年（1358年）、元肥後國領主であった菊池武重、菊池武光が征西將軍の命を奉じて九州を平定する際に築城し、臣下を城主に配し近辺を鎮撫させたと云う。その後、当地の霸権を巡って様々な争いが行われたようだが、天正年間（1573年～1591年）に秋月領となり、秋月種實の臣下である恵利三郎満政が城主となった。

天正14年（1586年）に始まる豊臣秀吉の九州出兵の際、秋月氏は地理的条件から豊臣軍への前線に立つことになる。田川地方では岩石城に秋月臣下の熊井氏を城将として三千の兵を配し防衛の拠点としたが、この後方拠点の一つとして城山城にも兵が配置されたようである。

翌天正15年3月28日に秀吉は小倉城に到着する。翌29日の軍議で秋月氏攻略が正式決定するが、秀吉は当初岩石城は堅固で攻略が難しいと判断し、前田隊ら主力は後方に残し細川忠興らに筑前古廻山城を攻めさせようとした。しかし、蒲生氏郷と前田利長は岩石城攻略を主張し自ら攻城担当に名乗りを上げたため、豊臣秀勝を大將に岩石城攻撃を決定した。4月1日に岩石城攻撃が始まり、その日のうちに落城し城将熊井氏は討死する。この時の岩石城攻略戦は城山城からもよく見えたことであろう。難攻不落と云われた岩石城がたった1日で落城する様を目のあたりにした兵達の動揺は想像に難くない。

岩石城を攻略した蒲生、前田隊は裏道を進軍し、町内に所在していた龍円城等を攻略しながら益富城を目指すこととなる。それに対し秀吉本体は表本道を通り、秋月街道を目指し進軍を開始した。途中で町内に所在した東川崎村や田原村を通るが、この時、村ごと焼き討ちにあったと云われている。

城山城攻撃が始まった正確な日時は伝わっていないが、向かいの金国山にある金国城と一緒に攻略戦が行われたようである。同じ頃に蒲生、前田隊による木城攻略戦が行われた。『豊前大鏡』の中で「添田岩石城に次ぐ激戦なり」との一文があるが、木城の落城を見た金国城城主太郎左衛門尉信武は城を捨て、早々に秋月に逃げ帰ったと云われている。これに対し、山城城主の満政は城に留まり、士卒を励まして防戦の準備に努めた。しかし、周辺にあった味方の城が次々と落城するとともに、眼下に秀吉軍が大挙して押し寄せてくる様を見て士卒の殆どは戦わずして逃げ散ってしまった。事茲に至って満政も負けを悟り、数名の腹心と共に自害し、ここに城山城は落城した。

その後は全くの廢城となるが、これより後地元の人はこの山を城山と呼ぶようになり、明治期になると満政を偲んで祭典が行われるようになり現在にいたっている。



第1図 城山城跡と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|----------|-----------|----------|---------------|
| 1 城山城跡 | 2 田原遺跡 | 3 公門原遺跡 | 4 寅加塚遺跡 |
| 5 号四郎窯跡 | 6 鎮西原遺跡 | 7 西川崎遺跡 | 8 川崎塚田・ヤシキ前遺跡 |
| 9 永井遺跡 | 10 七反坪遺跡 | 11 朝倉古墳群 | 12 真崎遺跡 |
| 13 宮前遺跡群 | 14 戸山原古墳群 | 15 龍円城跡 | 16 木城遺跡群 |

第2章 調査の概要

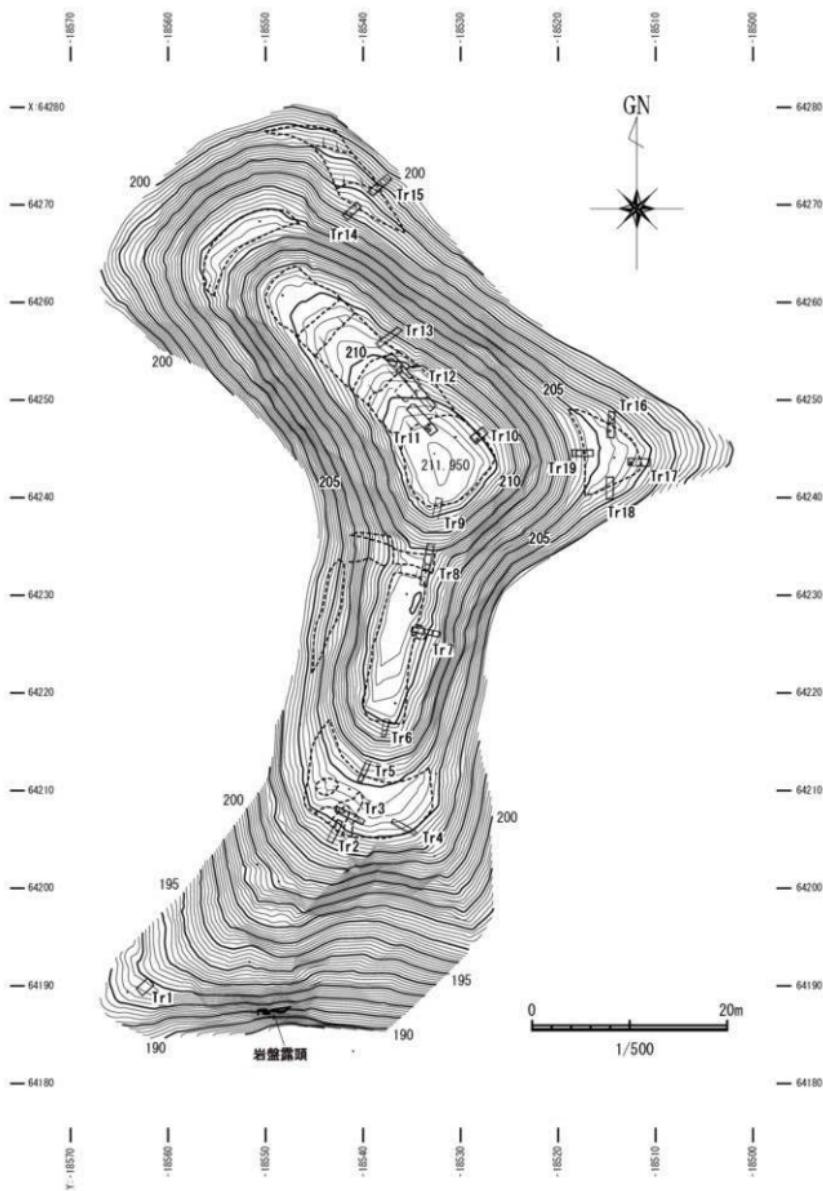
第1節 全体の概要

城山は、川崎町から田川市猪国境に位置する田尻山（標高 211.95 m）の尾根に沿って造られた中世山城である。古くより双方の地域（川崎町太田地区・田川市田尻地区）では城の存在が伝承等で伝えられていた。特に、城跡の所在する田尻山の登り口は、田川市側の田尻集落にある。地域では具体的な伝承等も残され城主の靈も祀られていることや、近世に至ると秋月街道等の主要道も通っている。さらに、西側の金国山麓の立尾城をはじめとする城も配置されるなど、戦略上重要な場所であったことがうかがえる。そのようなことから、城山城は西側の谷部分を意識して築城されたものと思われる。

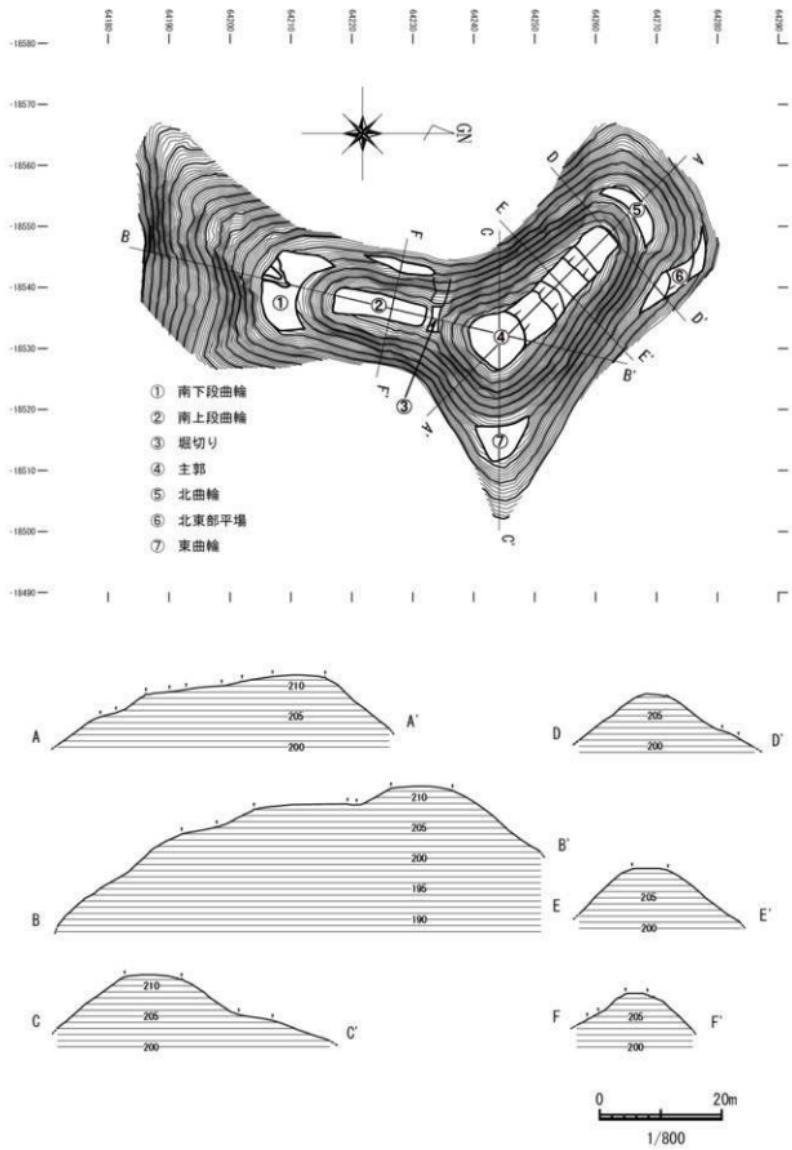
今回の調査は、川崎町の周辺公園化整備計画の基礎資料の作成のために実施した史跡範囲内容確認調査である。位置的には、田尻山の山頂及びそれに続く尾根上の田川市との境に立地しており、多くの範囲が田川市側であり、調査範囲はかなり限定的なものとなったが、全体の測量のみは行うことができ、川崎町側の遺構においては確認のためのトレンチを設定し、不十分ながら概要のみは確認することができた。

第2節 調査前の状況

調査前の現状確認では、三方の尾根が交わる頂上部に主郭が存在し、それに続く北側に長い長方形形状の平坦面が緩く下降していた。この部分は、不明確ではあるが段がつくものと想定された。さらに、一段下がって三日月状の曲輪が所在する。これより北側は 6 m 程下り、さらに北側へと長い尾根が続き自然の要害を形成している。また、この三日月状の曲輪の北東直下には逆 L 字状の平坦面が東から北に広がる。主郭南側には直下に堀切が確認され、それを隔てて瘦尾根上に狭小な長方形形状の曲輪が所在する。これに沿って西側直下にも帶状の平坦面が認められた。さらに、南側の一段下に曲輪があり、虎口状の落ち込みが確認できた。こちら側が麓の田尻集落（田川市）に続く道となり、入口になるものと思われる。主郭東側にも直下に曲輪が確認できた。周囲は急斜面となる。このほかにも、関連遺構の確認のため北側に続く尾根上も確認したが、現状では遺構は確認されず、また東側の丘陵下にやはり地元で城山と呼ばれる低丘陵が所在するが、ここも遺構らしきものは確認できなかった。



第2図 城山城跡全体図(1/500)



第3図 城山城跡構配置図 (1/800)

第3節 調査の内容

●南東側斜面の確認調査

調査に先立ち、南北側の斜面に石垣らしき地形が確認されたため、周辺の伐採を行い表面の清掃を行った。その結果、岩盤の露頭であることが確認された。このような露頭が、周囲には幾つか確認されている。特に、この山は材木石で形成されているため、石の性質上、壊れると各礫状となり、周辺ではこれらが蓄積していることが多い。そのため、露頭の部分でも石垣状に見える部分がある。

●城域の規模とトレーニング調査について

城の遺構や規模については、事前の現状調査や県報告『福岡県の中世城館跡II（豊前）編』などで大方は把握できていた。遺構については、主郭（マウンド部分となだらかに下降する平坦部）と南側の堀切りを挟んだ副郭と考えられる曲輪、さらに、北・南・東の三方の尾根上に曲輪が設置され、これらで城域を構成していると考えられる。全体の規模は、主郭（マウンド部）の上端を基点として北側の北曲輪の北端部までが約37m、南側の南曲輪の南端部までが約45m、東曲輪の東端部までが約24mを測る。トレーニング調査では、主郭及び南上段曲輪部は岩盤を掘削・整形して切岸を作りだしていたことがわかる。また、基本的に削平して構築したためか、土層上ではほとんど旧表土が確認できず、また盛土についても根の張り方が激しい点もあるが、明確に把握できない部分が多かった。各曲輪の平坦面については築造時から長い間に周囲の肩部分が流れ落ちているようで、断面上でみると丸みを帯びるかなりの勾配で落ちている。

以下、トレーニングの調査結果から各遺構について説明を加える。

◆1号トレーニング

南下段曲輪から北西に約11mほど下がった部分でややフラットな面があり、石が集石していることから確認のためにトレーニングを入れた。標高はほぼ192mから193m、土層は、主郭方向を向き、主軸方向はN-59°-Eである。表土は約10から30cmで細かな根が多く含み、黒褐色土が堆積し、材木石が風化してきた角礫が混じっていた。中央部は最近のカクランが確認され、ビニール片が混じっていた。表土の下は岩盤であり、遺構ではないことが確認された。

○南下段曲輪

主郭の南側に位置し、上部には南上段曲輪が所在する。規模は、北側裾部で東西に約14m、同じく裾部から南側の端部まで約6mを測り三日月状の平坦面となるが、北側の裾部を頂点として、周囲はなだらかに下降している。北側斜面を掘削し周囲を整形したものと考えられる。上部の南上段曲輪との比高差は約3mである。

南東部は、斜面が崩落したと考えられる切り立った崖となり、東曲輪から主郭の南東斜面を挟

んで南上段曲輪との間も切り立ったほぼ崖状の斜面となっている。

中央から南側端部にかけて現在でも、頂上部から田尻（田川市猪国）集落へと続く山道が通っているが、土層などからも古くから利用されていたものと考えられ、虎口の名残とも考えられる。断面上では凹状となり、なだらかに下降する。

◆ 2号トレーナー

曲輪の南東部に位置する。平坦面とその端部の確認のために設定した。標高はほぼ 203 から 204 mで、土層面は主郭方向を向き、主軸方向は N - 39° - Wである。山道のほぼ中心南北に沿って切通状となる。土層は表土が 5 から 10cmで、その下は地山となる。

◆ 3号トレーナー

2号トレーナーのすぐ北側に位置する。現在、山道として利用されている中央の 2号方向に続く落ち込みが虎口の可能性があり確認を行った。標高はほぼ 203 から 204 m、主郭方向と直交する方向にトレーナーを設定した。土層面の主軸方向は N - 44° - Wである。中央から西にかけては表土も厚くなる。東側に平坦面があり、表土は約 5cmでその下は地山となる。それから西側に緩やかな凹レンズ状の落ち込みが確認でき、淡黒褐色土が堆積する。東側の最高所からの深さは約 60cm、底部幅が約 80cm となり、中心部より西側は一部のみの確認のため詳細は不明であるが、現状では東側のようにそれほど立ち上がらない。

◆ 4号トレーナー

3号トレーナーの東側、曲輪の東側端部を確認するために設定した。標高はほぼ 203 から 204 m、3号トレーナーの延長上にトレーナーを設定した。土層面の主軸方向は N - 48° - Wである。表土が約 5 から 10cmあり、地山は凹凸が認められ、その上に整形のための盛土が認められる。なだらかな弧を描きながら東側に下降する。このトレーナーと対応する西側の端部については、今回は見調査である。

◆ 5号トレーナー

南上段曲輪の裾部となる。曲輪の立ち上がりを確認するために設定した。表面の標高はほぼ 203.8 から 204.5 m、2号トレーナーの延長上に設定した。主軸方向は N - 44° - Eである。土層は表土が約 10 から 25cm あり、立ち上がりはトレーナーの北側 1/3 のところで屈曲し、やや上へ延び、そこから南側になだらかに下降する。表土と地山の間には、堆積土が認められる。

○南上段曲輪

主郭の南側に位置する。副郭と考えられ、主郭との間には堀切りで隔する。南北方向に主軸を置き、全長約 15 m、幅約 3 m の狭小な長方形を呈する。全体的になだらかな平坦部を形成し、南側の堀切りに近い部分が最高所となる。東側は急峻な崖となり、西側も基本的に同様で、約 2 m 下部に曲輪に沿って帯状の平坦面があるが、今回の調査範囲外であり性格は不明である。曲輪全体は、岩盤を掘削・整形して構築されている。

◆ 6号トレンチ

曲輪の南側端部の確認のため設定した。標高はほぼ 207.4 から 208.2 m、5号トレンチのほぼ延長上に設定した。土層面の主軸方向は N-31°-E である。表土が約 10cm あり、端部はトレンチの南側 3/4 のところで落ちる。上部はなだらかに丸みをおびる。表土のすぐ下は岩盤となる。

◆ 7号トレンチ

曲輪の短辺部端の確認のため設定した。標高はほぼ 206.9 から 208.8 m、土層面の主軸方向は N-59°-W である。表土は約 5 から 10cm で、端部はトレンチの東側端部付近で急に落ちる。上部はなだらかに丸みをおびる。表土と土層②については明瞭な差は認められなかった。②の部分については当初からの形状であると考えられる。岩盤の間には盛土状の土層が見られる。このトレンチと対応する西側の端部は未調査である。

○堀切

◆ 8号トレンチ

調査前より主郭と南上段曲輪の間に堀切状の窪みが確認されており、この形状を明らかにするために設定した。田川市との行政境に位置するため、中央よりやや東側のほぼ標高 209 m、土層面の主軸方向は N-38°-E 方向にトレンチを入れ確認を行った。

調査の結果、堀切の平面プランは現状では鼓状となり、東西の端部で落ちる。両端幅は、断面上で約 3.75 m、表土からの深さは最深部で約 60cm と浅く、形状は凹レンズ状を呈する。主郭側は急な立ち上がりとなり、曲輪側は緩やかに立ち上がる。岩盤を掘削・整形し造られている。堀切の底部から主郭の端部までの比高差は調査後の計測で約 3 m を測る。

○主郭

調査前の状況説明では、主郭と北側の曲輪ということで記述したが、主郭の楕円状の高まりから緩く平坦面が下降していくことから不明確な部分も多く、ここでは双方を同時に取り上げ説明することとする。

主郭は、南東側から北西に延びる尾根と、さらに東側に伸びる尾根の頂上部に位置する。南東部から北東部を主軸として約 9 m × 11 m の楕円形のマウンド状の高まりと、それに続く幅約 4 m、長さ約 20 m の平坦面が緩く下降しながら延びる。途中、緩い段状の勾配が確認でき曲輪の区切りとも考えられたが、田川市側となるため調査ができず、詳細については不明である。主郭マウンド部から北側に延びる部分の付け根には角礫が集積していた。また、やや東寄りの付け根には陥没壙が認められた。

この主郭マウンド部から集石部分と北側に延びる平坦面の関係を確認するため、11号・12号トレンチを設定した。その結果 11号では、岩盤の平坦面が確認され、それに続く 12号では、主郭マウンドから北側に溝状の落ち込みがあり、反対側の立ち上がり部分で若干の高まりが認められ、それを頂点として緩やかに下降し北東側に延びていくことがわかった。これより北側については前述したとおり未発掘のため詳細が不明である。現状では、北部側の端部幅約 6 m となる。

長辺の両端は急斜面となり、北東側には北曲輪が位置する。

◆ 9号トレンチ

主郭の南側の端部の確認のために設定した。標高はほぼ 210.9 から 211.8 m、土層面の主軸方向は N-30°-E である。表土は約 5 から 10cm で、端部はなだらかに弧状を描き、表土の下は角礫を含む暗褐色土であるが、これは岩盤が風化したものである。

◆ 10号トレンチ

主郭の東側の端部の確認のために設定した。標高は 210.5 から 211.2 m、土層面の主軸方向は N-69°-E である。表土は約 5 から 20cm で、やや下側にえぐれる部分もあるが、外側に丸みをおびながら下降する。土層は根等の侵入が激しい。北側部分は岩盤が風化したものである。ピットが 2ヶ所確認される。

【出土遺物】

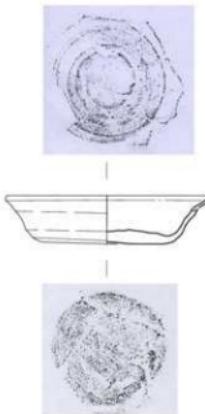
1号ピットの上部より土師器環の底部が 1 点出土している。復元で口径は 12.5cm、器高 3.5cm、底径 8.2cm、底部は平らで体部は外反する。焼成良好で、内外面とも赤褐色を呈する。胎土は精製された粘土が使用され、黒雲母を含む。調整は、内外面とともにヨコナデ、底部外面は回転糸切りで中心部をヘラ状のものでナデている。内面はナデを施す。内外面に墨書きの痕跡が見られるが明確ではない。

◆ 11号トレンチ

主郭の北東側の端部の確認のために設定した。標高はほぼ 211.4 から 211.8 m、土層面の主軸方向は N-22°-W である。表土が約 15 から 25cm で、その下は地山と岩盤となる。北東側にやや下降するが、ほぼ平坦面となる。まとまらないが、ピットが 5ヶ所検出されている。

◆ 12号トレンチ

主郭の北東側端部から曲輪の境の確認のために設定した。本来 11 号を伸ばせれば良いのであるが、行政区の関係上不規則なトレンチを設定している。標高はほぼ 210.0 から 211.4 m、土層面の主軸方向は N-17°-W である。中央を除きほぼ表土が約 5 から 15cm で、南側の主郭部は地山と一部が岩盤となり、外側に円弧を描いて下降し堀切り状の落ち込みとなる。この部分は、当初平面的には台形状の陥没部分があり大木の抜き跡とみられていたが、土層を確認すると溝状の落ち込みであると考えられ、さらに西側へと回り主郭と北曲輪を区切る可能性も出てきた。この溝状の部分から北側に立ち上げると北側平坦部との境に石や盛土で高まりとなり、この部分から緩く下降していく。この周辺は礫石が集積していた。土層⑥の直上より土師器片が出土してい



第4図

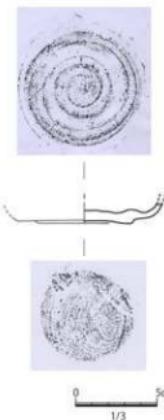
0 5cm
1/3

10号トレンチ出土
土師器実測図(1/3)

る。

【出土遺物】

土師器環底部が1点出土している。底径8.2cm。体部は丸みをおび、直立気味に立ち上がる。焼成良好で、内面は淡暗褐色及び淡黄褐色を呈す。胎土は精製された粘土が使用され、黒雲母を含む。調整は、内外面ともにヨコナデ、底部外面は回転糸切りで内面はナデを施す。



第5図

12号トレンチ出土
土師器実測図(1/3)

◆ 13号トレンチ

曲輪の北東側の端部の確認のために設定した。標高はほぼ209.3から209.8m、土層面の主軸方向はN-74°-Eである。表土は約15から30cmで、基本的に表土の下が地山となる。外側に丸みをおびながら下降するが、途中でやや反り気味に屈曲する。

○北曲輪

主郭の北西側下部に位置する。今回、田川市側となるため未調査である。規模は、南東側裾部で北東から南西方向に約12m、同じく裾部から北東側の端部まで約2mを測り、三日月状の平坦面となっている。周囲は、なだらかに下降している。丘陵斜面を掘削・整形したものと考えられる。上部の主郭との比高差は、約2.8mである。周囲は斜面となる。

○北東部平場

主郭の北東部に位置する。規模は、曲輪に沿い逆L字状で全長7.8m、幅約4mを測る。上部の主郭との比高差は主郭の北東部で約5.5m、北曲輪で約2.5mを測る。北東側は急斜面となる。これと対応する北西側にも不明確であるが平場状の場所が確認できるが、未調査である。

◆ 14・15号トレンチ

北東部平場の状況を確認するために設定した。標高はほぼ200.4から203.2m、土層面の主軸方向はN-30°-Wである。表土は約5から20cmで、14号は上部では岩盤が露出しており、下部で15号方向に平坦面が認められ、15号トレンチから徐々に下降していき、トレンチの北東部でさらに激しく下降する。

○東曲輪

主郭の東側に位置する。規模は、西側裾部で南北に約 9 m、同じく裾部から東側の端部まで約 6 m を測り、半円状の平坦面となっている。周囲は、なだらかに下降している。主郭からの斜面を掘削し、周囲を整形したものと考えられる。上部の主郭との比高差は約 5.8 m である。南北側は急斜面の谷となる。

◆ 16 号トレーナー

曲輪の北側端部の確認のために設定した。標高はほぼ 204.3 から 205.0 m、土層面の主軸方向は N-25°-E である。表土は約 10 から 15cm で、地山との間には約 10cm 程の盛土が確認される。丸みをおびながらゆるやかに下降する。西側壁の南側にピットが 1 ケ所確認される。地山は岩盤である。

◆ 17 号トレーナー

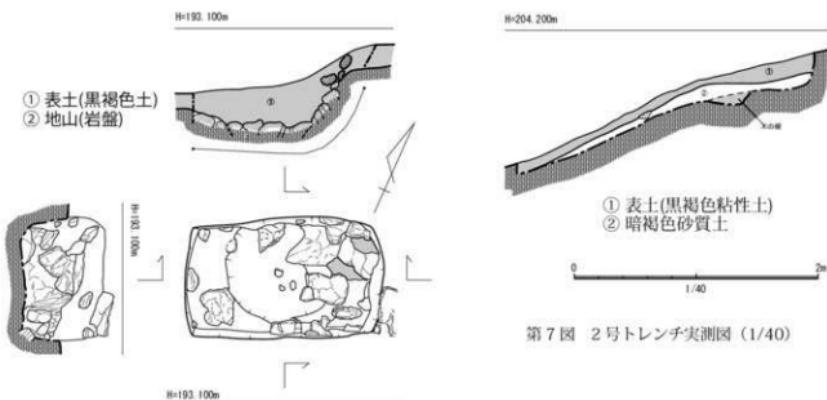
曲輪の西側端部の確認のために設定した。標高はほぼ 204.0 から 204.6 m、土層面の主軸方向は N-61°-W である。表土は約 10 から 20cm で、地山との間には約 15cm 程の盛土が確認される。ゆるやかに丸みをおびながら下降する。西側にピットが 1 ケ所確認される。地山は岩盤である。

◆ 18 号トレーナー

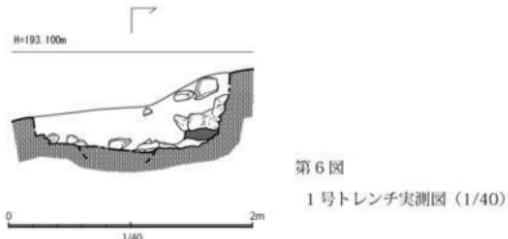
曲輪の西側端部の確認のために設定した。標高はほぼ 204.1 から 204.8 m、土層面の主軸方向は N-23°-E である。表土が約 10cm あり、その直下が地山と考えられるが、根の密集が激しいため判別がしづらく盛土の可能性も考えられる。丸みをおびながら下降する。西側にピットが 1 ケ所確認される。地山は岩盤である。

◆ 19 号トレーナー

主郭との立ち上がり確認のために設定した。標高はほぼ 204.0 から 204.6 m、土層面の主軸方向は N-65°-W である。表土は約 10 から 20cm で、地山との間には約 5 から 10cm 程の盛土が確認される。地山は岩盤である。

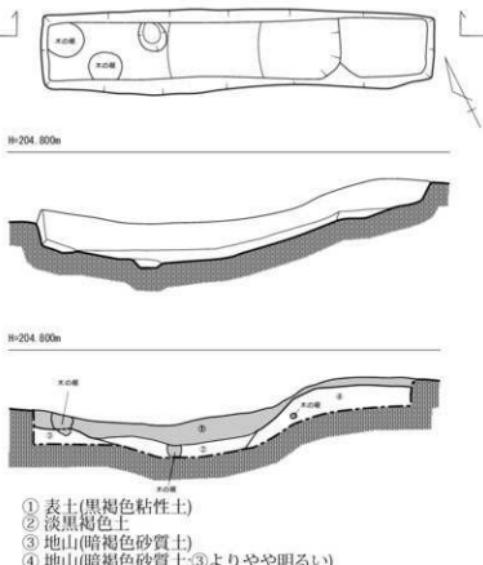


第7図 2号トレンチ実測図 (1/40)



第6図

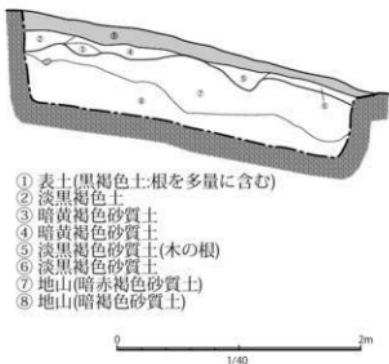
1号トレンチ実測図 (1/40)



第8図

3号トレンチ実測図
(1/40)

H=204.700m



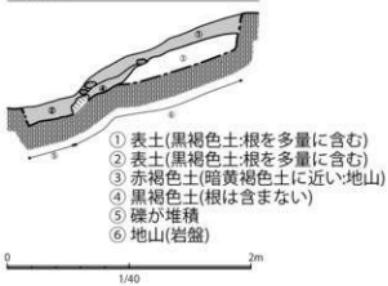
第9図 4号トレチ土層実測図 (1/40)

H=205.900m



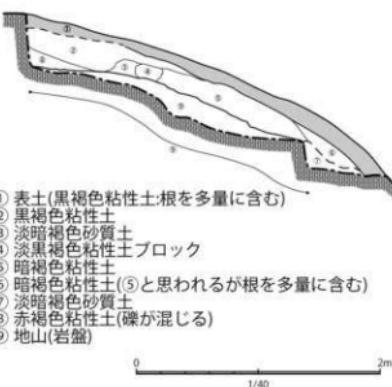
第10図 5号トレチ土層実測図 (1/40)

H=208.300m

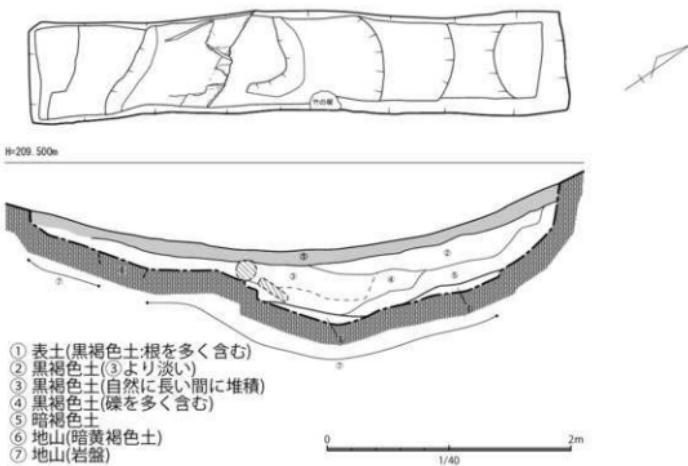


第11図 6号トレチ土層実測図 (1/40)

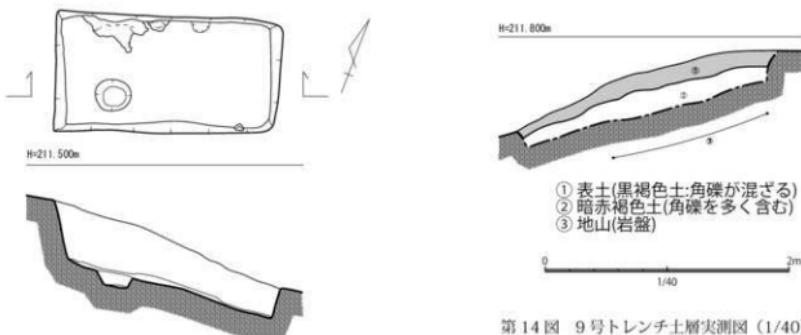
H=209.000m



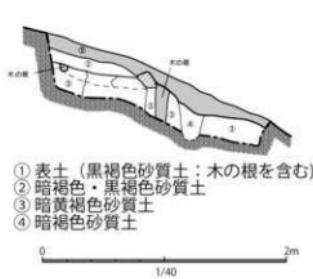
第12図 7号トレチ土層実測図 (1/40)



第13図 8号トレンチ実測図（1/40）

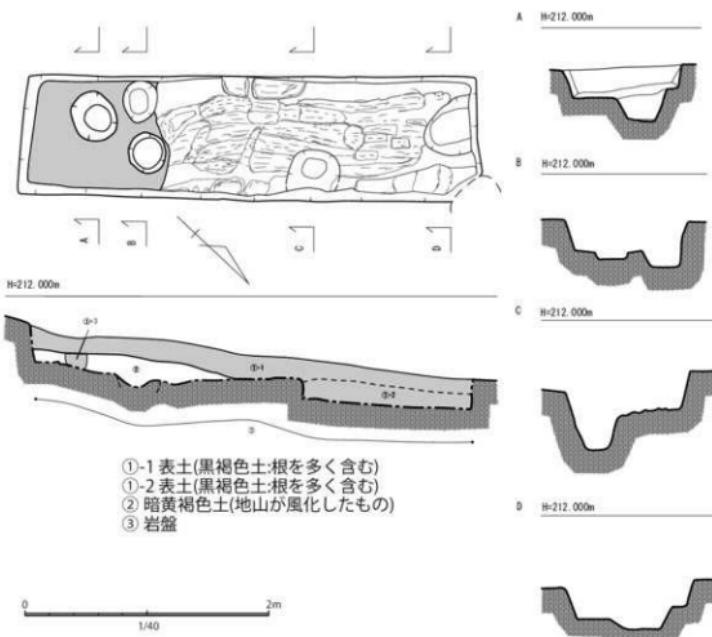


第14図 9号トレンチ土層実測図（1/40）

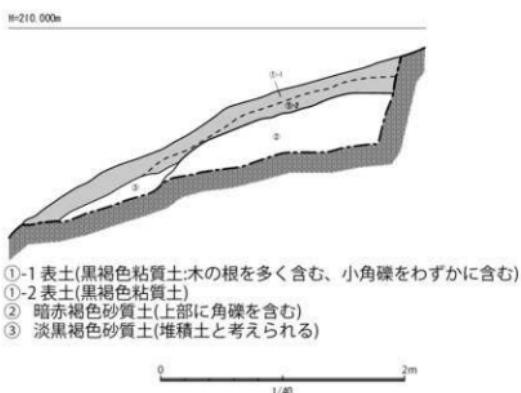


第15図

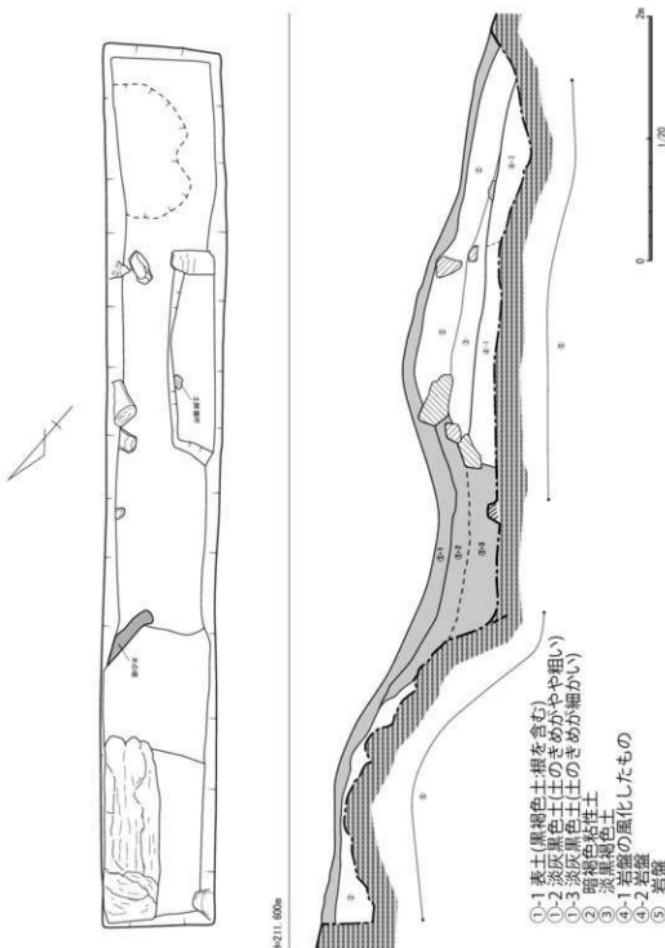
10号トレンチ実測図（1/40）



第 16 図 11 号トレンチ実測図 (1/40)

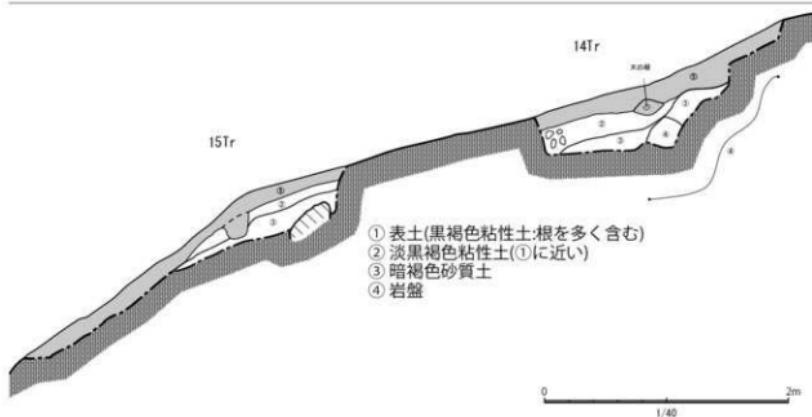


第 18 図 13 号トレンチ土層実測図 (1/40)

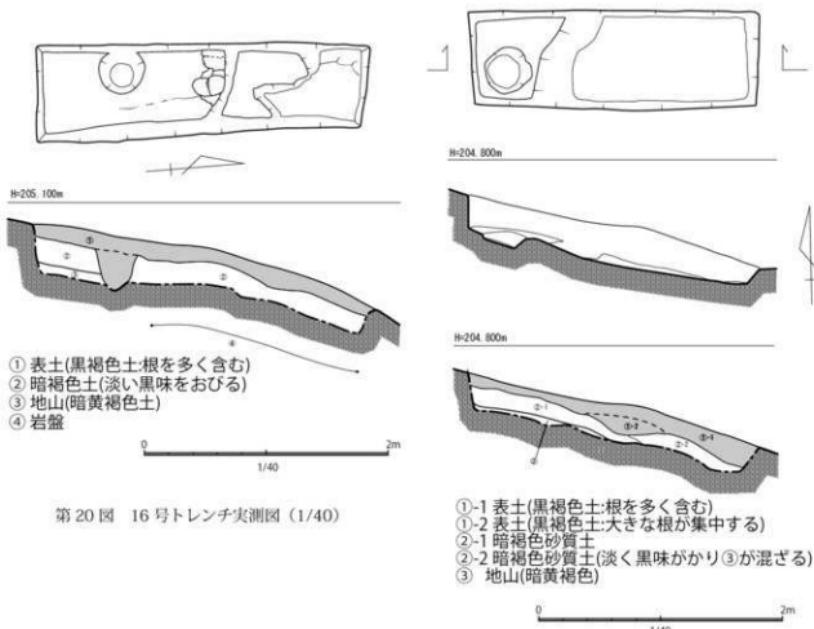


第17図 12号トレンチ実測図 (1/40)

H=203.300m

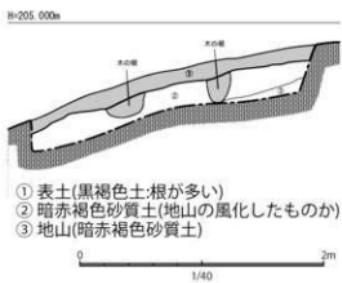


第19図 14・15号トレンチ土層実測図(1/40)

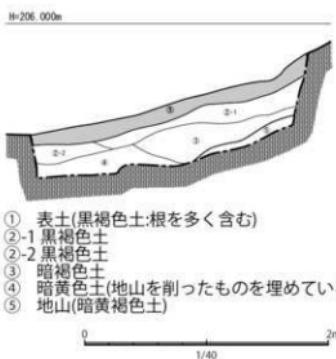
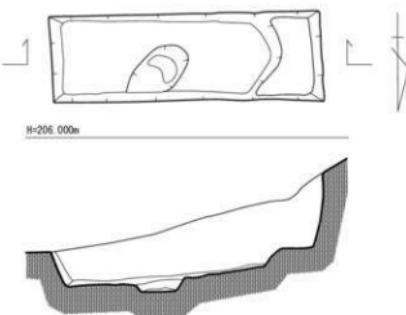


第20図 16号トレンチ実測図(1/40)

第21図 17号トレンチ実測図(1/40)



第22図 18号トレンチ土層実測図 (1/40)



第23図 19号トレンチ実測図 (1/40)

第3章 総括

今回、田川市との境界上にあるという制約の中で行った調査であるため全体の内容については不明な部分が多いが、城域についてはほぼ測量することができたため、規模や遺構配置等の概要是明らかにすることができた。これまで田川地域では中世山城で正式に行った調査例は香春町の香春岳（二ノ岳）^{註1}遺跡、川崎町の龍円城跡^{註2}、大任町の明神山城跡^{註3}のみであり数少ない。そのような中で主郭を中心として副郭とその間に堀切、北側・東側・南側の尾根上に曲輪等を確認できた。小規模の中世山城であるが、ほぼ廃城当時のままの姿で残っていることがわかり、数少ないこの地域の山城の調査例に新たな情報が加わる貴重な調査例となった。

地元に残る伝承によると、「正平13(1358)年に、菊池武重、菊池武光が築いたといわれている」。^{註4}出土品が少ないため考古学的な時期判別は難しいが、10号トレンチのピットから出土した土師器が並行する時期と考えられるが、類例が少なく、また他の陶磁器類等の出土もないことから今後の課題としたい。また、廃城については「天正15(1587)年、豊臣秀吉の九州征伐の際、落城した」とある。明治16年、田尻（田川市猪国）の人々が城主の恵利三郎満政の靈を、五穀神社として祀って祭典を行っていたが、最近は廢れている。

また、今回調査した城山城跡（田尻山）の川崎町太田側の谷の麓にも、地元の人が城山と呼んでいる丘陵があり、周辺からは太田の村の起源を語るために重要な西山寺があったといわれ、瓦などが出土すると言われる。小規模の山城であるが、川崎町、田川市側双方の地域で比較的記録や伝承が残っている。

将来的には、今回の結果を踏まえ田川市側を含めた遺構の調査を行うと共に、考古学的調査のみにとらわれず、周辺の地理的考察や地域に残る記録・伝承等の各分野について総合的に調査し全容を明らかにする必要があろう。また、これらと並行して活用方法も検討し、住民に親しまれる城跡として後世に伝えていくことが望まれる。

註1：香春町教育委員会編 1992『香春岳 香春岳の総合調査』香春町文化財調査報告書第8集

註2：川崎町教育委員会編 2013『龍円城跡』川崎町文化財調査報告書第11集

註3：大任町教育委員会編 2004『狐塚横穴墓群 明神山城跡』大任町文化財調査報告書8集

註4：猪位金村役場 1926『猪位金村沿革史』

第4章 附編（参考資料）

【参考資料】

城山に関する記録・伝承等は多くないが、下記の2つを掲載する。

○城跡 一ヶ所 猪膝村の内勝山

右は細川三斎筑前境に出城可築と見分せられ候所、此の山の名をば何と申すぞとたずねられければ、所の物、是は勝山と申し候に付き能き場所也として即ち此山を切り開き櫓を建て彌出城にすべき由之處、一国一城の御掟で候に付き櫓を解き申されし也。

『豊前古城記』（有吉憲彰編「福岡県郷土叢書」1931所収）より

○勝山城

勝山城は、猪位金村田尻の東方に聳える城山の頂にあり 正平十三（1358）年、菊池武重・菊池武光、征西將軍の命を奉して九州を平定せんとする時、本城を築き、立尾城（西側にそびえる金國山の中腹にあった）と共に、其臣下を在城せしめ近辺を鎮撫せしが、年替り星移りて、天正年中（1573～1591）には秋月種實の臣 恵利三郎満政在城せり 然るに天正十五（1587）年豊臣秀吉公、九州御征伐之時、岩石城・立尾城相次て落城し（香春嶽城は前年即ち天正十四年冬落城せり）、立尾城主城太郎左衛門尉信武は城を去て筑前秋月に蟄居するに至れり、然れども満政は当城に據り士卒を励まし防戦に努めたるも近辺の諸城は何れも落城して秀吉公の軍勢は城の前後より潮の如く攻め来たりければ士卒共怖れて落ちいきたり 茲に於いて満政は支ふ有らざるを覺り 腹心の者数人と相共に城中に自害し城終に陥つる。爾後全く廃城となれり 城のありたる山なれば里人呼んで城山と云う。

明治十二（1879）年に至り 田尻の人々、城主恵利三郎満政の靈を五穀神社と齋き祀りて石室を建立し年々祭典怠る事なし。

『猪位金村沿革史』猪位金村役場 大正15（1926）年より

図 版

PLATE



城山城より金国山を望む（航空写真）



城山城より古処山を望む（航空写真）

図版.2



城山城主郭部付近（航空写真）



城山城主郭部付近調査風景（航空写真）

図版.3

城山城跡遠景 1
(北東側、島廻地区
より撮影)



城山城跡遠景 2
(東側、太田地区より撮影)



城山城跡遠景 3
(西側、田川市猪国畠
より撮影)



図版.4

城山城跡遠景 4

(西側、田川市猪国より
撮影。麓は田尻集落)



城山城跡全景

(南側、直下より撮影)



発掘調査前の主郭部

(東平場より撮影)



図版.5

東曲輪
(主郭より撮影)



南上段曲輪
(主郭より撮影)



南上段曲輪から主郭を望む(パノラマ撮影)

図版.6

南下段曲輪の手前から主郭を望む



南上段曲輪から
南下段曲輪を望む



主郭北西側の南側斜面



北側より主郭部を望む（パノラマ撮影）



発掘調査前の北東部平場周辺 1（北側より撮影）



発掘調査前の北東部平場周辺 2（東側より撮影）

図版.8

南東側の岩盤露頭



発掘調査前の 1 号
トレンチ周辺
(北側より撮影)



1 号トレンチ全景 1
(南側より撮影)



図版 .9



1号トレンチ全景 2
(南東側より撮影)



2号トレンチ全景 1
(北側より撮影)



2号トレンチ全景 2
(東側より撮影)

図版.10

3号トレンチ全景1
(南側より撮影)



3号トレンチ全景2
(南東側より撮影)



4号トレンチ全景
(西側より撮影)



図版.11



4号トレンチ土層断面
(南側より撮影)



5号トレンチ全景
(南側より撮影)



5号トレンチ土層断面
(東側より撮影)

図版.12

6号トレンチ全景
(北側より撮影)



6号トレンチ全景
及び土層断面
(北東側より撮影)



7号トレンチ全景
(南側より撮影)





調査前の堀切り部（主郭南側よりパノラマ撮影）



8号トレンチ全景 1
(南側より撮影)



8号トレンチ全景 2
(南西側より撮影)

図版.14

8号トレンチ全景
及び土層断面1
(南東側より撮影)



8号トレンチ全景
及び土層断面2
(北東側より撮影)



8号トレンチ全景
(北側より撮影)



図版.15



9号トレンチ全景
(南側より撮影)



9号トレンチ全景
及び土層断面
(南東側より撮影)



10号トレンチ全景
(北東側より撮影)

図版.16

10号トレンチ全景
及び土層断面
(南東側より撮影)



11・12号トレンチ全景
(南東側より撮影)



11号トレンチ全景
(北東側より撮影)



図版.17



11号トレンチ全景
及び土層断面
(北東側より撮影)



12号トレンチ全景1
(北東側より撮影)



12号トレンチ全景2 (北東側よりパノラマ撮影)

図版.18

12号トレンチ全景
及び土層断面
(南東側より撮影)



12号トレンチ
中央部落込み状況



12号トレンチ
集石検出状況



12号トレンチ内土師器出土状況



13号トレンチ全景
(北東側より撮影)



13号トレンチ全景
及び土層断面
(北西側より撮影)



図版.20

14・15号トレンチ全景
(南西側より撮影)



14号トレンチ全景
(南西側より撮影)



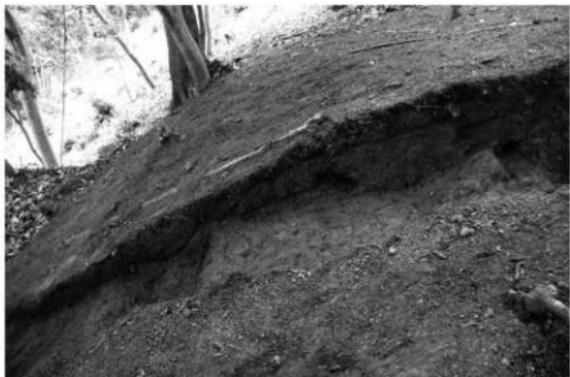
14号トレンチ全景
及び土層断面
(北東側より撮影)



図版.21



15号トレンチ全景
(南西側より撮影)



15号トレンチ全景
及び土層断面
(北西側より撮影)



16号トレンチ全景
(南側より撮影)

図版.22

16号トレンチ全景
及び土層断面
(東側より撮影)



17号トレンチ全景
(西側より撮影)



17号トレンチ全景
及び土層断面
(南側より撮影)



図版.23



18号トレンチ全景
(北側より撮影)



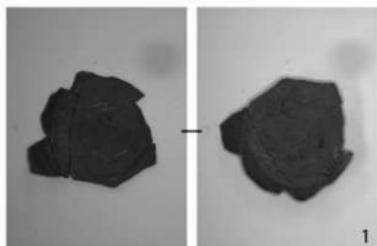
18号トレンチ全景
及び土層断面
(東側より撮影)



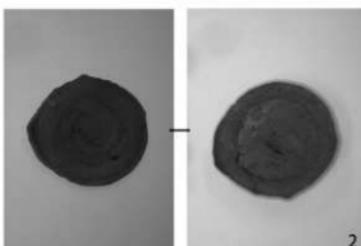
19号トレンチ全景
(東側より撮影)

図版.24

19号トレンチ全景
及び土層断面
(北西側より撮影)



1. 10号トレンチ出土土師器



2. 12号トレンチ出土土師器

報 告 書 抄 錄

城山城跡

川崎町文化財調査報告書

第19集

平成31年3月31日

発行 川崎町教育委員会
福岡県田川郡川崎町大字田原786-2

印刷 丸五印刷株式会社
福岡県田川郡添田町大字庄1635-1